

国立国会図書館参考書誌部経済社会課編

人物文献索引 経済・社会編

明治以降—昭和43年刊行分

昭和44年3月刊 283 p.

この索引は同館が先に手がけた『日本社会・労働運動家伝記目録』および『人物文献索引 人文編 昭和20—39年刊行分』の続刊である。

人物文献索引とはいささか聞きなれない言葉であるが—Personal bibliographyの訳であろうか—、内容を通覧するとまさしく人物文献としか言いようがない。それは、国会図書館の邦文蔵書中から経済・社会（じっさいには、法・政・文その他にもおよぶ）の各分野に業績をもつ日本人、外国人の他伝、自伝をはじめとして、年譜、略歴、著作目録、追悼・回想録、書簡集、対談、研究ノートにおよぶ一切の伝記資料を拾いだして収録しており、著作集や研究書の巻末にそえられたわずかな関係ページをも見逃していない。

まず、本索引の主要な書誌的特質を列記してみよう。

- 1 採録文献総数 6,500余点。このうち、
日本人 3,600余点（およそ1,700名）
外国人 2,900余点（およそ 700名）
- 2 カヴァーする時期
日本人 主要活動時期を明治以降とし、文献の発行年が明治期から昭和43年にいたるもの。
外国人 活動時期を16世紀以降とし、文献の発行年は上記に同じ。
- 3 採録対象 単行本を主とし、雑誌・紀要類からの採録は書目、特集号、単行書であ

つかわれていない伝記記事に限定されている。

- 4 編成 「日本人の部」（pp. 1—141）、
「外国人の部」（pp. 143—267）、「中国人等」（pp. 268—271）、「外国人名一覧」（pp. 273—283）に分かれ、人名一覧をのぞく各部は「個人」と「列伝」に分かれていて、前者の配列は被伝者名のABC順、後者の配列は大まかな分類別となっている。被伝者については可能な限りの生没年と、難読日本人名のミミが付されている。
- 5 既刊の「人物文献索引・人文編」、「日本社会・労働運動家伝記目録」と重複して採録されているものについては、「を(も)みよ」参照が付されている。

一般に社会科学の研究に歴史的な視点を欠くことはできないが、各フィールドにおける歴史研究、とくに思想史研究においては人の研究が重要な環となる。その意味において、本索引のような二次文献が果たす役割はきわめて大きいと言わねばならない。かつて評者をふくむ経済資料担当者の会合の席上で、杉原四郎教授（関西大）が「雑誌記事中に入っているオビチュアリーや著作目録などの資料を検索するのに便利な手がかりがなくて苦労する」という旨の発言をされたことを記憶しているが、そうした発言に代表されるような研究者の要望にこの索引は十分にこたえていると言ってよいであろう。

索引や書誌をつくる仕事にとまなう困難や労苦は、その凝集として行儀よくなればられた活字づからだけでは決してうかがい知ることのできないものである。しかしその作業を経験したものにとっては、現存の学者について巻末のさ細な著作目録にいたるまで採録されているのをみるとき（たとえば福武直、家永三郎等）、あるいはさして高名でない、むしろ無名にちかい人々にいたるまで丹念に掘り起こされているのをみるとき、煩瑣な作業過程に堪えられた索引|作成者の努力に深い敬意をおぼえざるをえない。たとえば、この索引には思想家、政治家、学者、実業家、社会運動家などのほかに多くの教育者や職業軍人、戦死者の伝記資料が採録されている。そのなかには、八田三喜、広瀬武夫、乃木希典、木口小平といった耳に憶えの名前も散見されるが、花房義夫、原田愛、福田米子、福山米助と、寡聞にして見知らぬ名前が圧倒的に多い。満州の特務機関員であった、石光真清という人の自伝的小説まで採録されているのはおどろきにちかい。これらは何といっても、多くの邦文蔵書を有する国会図書館の強味であろう。

間口のひろい採録ぶりは一見採録基準の無原則性に通ずる印象をあたえるが、にわかな速断は許されない。歴史研究のプロセスでは、どういう資料が必要になるか予測できない場合も多いし、知名人についての文献にちかづくのはだれにとっても容易であるが、無名の人々についてのそれは埋没しやすく、したがって容易に接近しがたいからである。しかも後者はエリートの歴史でなくて、大衆の歴史研究を志すものにとっては刮目すべき重要資料のひとつであろう。採録が節度を超えがちであることはこの種の二次文献のおちい

りやすいひとつの陥穽である。それにもかかわらず、一般的に言って資料担当者の立場からの採録厳選主義よりは、ゆるやかな基準内での雑多な採録の方がメリットが大きいのではあるまいか。

このほか、丹念な作業ぶりを伝える事項として、一人物について数多くの関連文献が収録されると同時に、ある文献について原本の初版、改版、復刻版、文庫、全集とじつによく追われていること——たとえば「福沢諭吉」の項では採録文献総数が78あり、「福翁自伝」だけでも矢野由次郎記、明治32年時事新報社刊の初版からはじまって、昭和41年角川書店刊の復元版にいたるまでじつに12点がおさめられている。第二に、おそらく印刷にまわすギリギリまで新しく受け入れた文献を克明に追っていること、である。「金井延」についてこれを見ると、河合榮治郎がその岳父について書いた評伝である「明治思想史の一断面」が、今年の1月に出版された「河合榮治郎全集」第8巻中に収められたそれ以来的まで採録されている。索引じたいの出版は冒頭に掲げたとおり3月である。

他方、まぬがれがたいもうひとつの欠陥として、採録の脱漏および不均等がある。この索引においても、全体としていえば前述のようにきわめて周到に採録されているのではあるが、やはり若干の脱漏とアンバランスが目についた。もっとも、採録対象は国会図書館の蔵書に限られているし、既刊の二目録に採られているのかもしれないから（手もとになくて確認できないが）、厳密な意味での脱漏とは言いかねる。しかし、同館にそれらの人物についての伝記資料がまったくないとはとうてい考えられないような脱漏もなかには見受けられたのである。

以下、紙幅と時間のかんけいで、もっぱら「日本人の部」についてのみそれをひろってみよう。

明治・大正の思想家のなかで、大西祝^{はじめ}、田中王堂（喜一）、綱島梁川、三宅雪嶺、狩野亨吉^{こうきち}などがみあたらないのはどうしたわけであろうか。田中王堂に関連しては「田中喜一1902-1」という項目があるが別人らしい。狩野亨吉については鈴木正氏のすぐれた研究がある（鈴木正『日本の合理論——狩野亨吉と中井正一』現代思潮社 昭和36年）。順序があとさきになるが、ついでに言えば、国会図書館の副館長であった中井正一も脱けおちている。狩野、中井ともに前述鈴木氏の著作の巻末に著作目録および兩人について書かれた文献の目録がある。

政治家があまり採録されているなかで、伊藤博文がない。その他、「高橋順次郎」や「姉崎正治」といった仏教学者が採られている一方、鈴木大拙がないのは「人文編」で担当しているのであろうか。岡倉天心も多分「人文編」の方であろう。ついでに言えば、思想史研究の場合は「人文編」とか「経済・社会」、「法律・政治」といった領域設定はほとんど意味がないのではなかろうか。作業担当者のごうで分冊出版するのならば、必要人物については完全に重出するか、相互参照を綿密にするか、編集上一考を要すると思われる。

大正、昭和と下ってくると、もともと伝記資料があるのかないのかわからない人物もかなり混じってくる。哲学者のなかで西田幾太郎、和辻哲郎、九鬼周造、朝永三十郎等がない。「三木清」、「戸坂潤」があって永田広志、古在由重、加藤正がない。経済学者、政治学者、史学者で、左古田喜一郎、美濃部達吉、津田左右吉などの大物が脱落しているの

も意外である。細井和喜蔵は「社・労伝」の方であろうか。左右田喜一郎は全集の第一巻に伝記がある。近年の物故者あるいは現存の学者の脱漏中、評者が伝記資料の存在を確認しえたものに脇村義太郎、舞出長五郎、八木芳之助、久武雅夫、菊池勇夫、菅谷重平、作田荘一、柳川昇、穂積文雄、末永茂喜、三浦新七、丸山真男、竹内好等の各氏があった。資料の有無は確認していないが、ひとつくらいはあってもと思われる方々に服部之総、石母田正、滝本誠一、南亮三郎、山田盛太郎、平野義太郎、美濃部亮吉、高橋誠一郎、高橋長太郎、小原敬士、高島善哉、高橋泰蔵、上原専祿などの各氏がある。

ややわきみににそれるが、大学の機関誌が教授の定年退官や還歴を記念して特集号を編集する場合、自機関に属する教授はもれなくその対象にするものと思いこんでいたところ、必らずしもそうではないらしいことがわかった。じつのところ、前記の方々はいずれも業績も多く高名な学者ばかりなので、脱漏を不思議におもい、二、三の方について資料をあたってみた。例にあげて恐縮だが、近年あい前後して一橋大を退官された上原専祿、高島善哉、高橋泰蔵、小原敬士の四教授については「一橋論叢」に年譜、著作目録などが掲載された形跡がない。また、山田盛太郎教授は土屋喬雄、馬場敬治の二教授とともに昭和34年に東大を退官されたのだが、「経済学論集」26巻1・2号が土屋教授の記念号として特集された折に、当時の経済学部長大河内一男氏があいさつを寄せられたなかで、退官三教授を記念して論文集を逐次刊行する旨述べておられるが、その後この二教授のために記念号が計画されたもうようがない。ただし馬場教授については「経済学論集」とかんけいなく

単行書の記念論集が出版されており、この索引にも採録されている。編集者の偶然の手落ちであったか、なんらかの編集方針によるものか事情はわからないが、部外者からみていささか片手落ちの感じがしないでもない。このほか高橋長太郎教授のようにせっかく記念論文集を発刊してもらいながら（藤野・宇田川編：経済成長と財政金融政策 勁草書房昭和42）、年譜や著作目録のついていない例もある。学問的業績に道しるべをつけようとする人々はもう少し自らの仕事に意識的であってもよいのではなかろうか。そうすることによってこの索引のような仕事の成果もより豊かになるとういうものである。

さて、しめくりにいささかアラ探しじみで申しわけないが、人名のヨミ、見出し名の

とり方、生没年に若干正確さを疑われる箇所があり気になった。たとえば「小岩井 浄1897—」とあるのは、数年前に他界されているし、「久留間^{こさづ}敏造」は「さめぞう」と読まれるのが正しくはないか。「鹿地 亘」は瀬口貢の本名でとった方がよくはないか——小牧近江が「近江谷 駒」の本名でとられていることでもあり——。

この種の作業に完べきを求めるのは影を追うようなもの、各自補うべきを補って利用するのが正しい態度とは言えまいか。失礼をわきまえぬ注文のかずかずを書きつらねたのは同じ仕事にたずさわるものとして自戒の意味もふくめたつもりである。索引編者のご寛恕をこいたい。

（名古屋大学経済学部）川原和子

編集後記

No. 2 の編集プラン、原稿依頼、執筆……、この時期は、まさに学園紛争の「最盛期」であった。執筆者、編集担当者、そして広告をお願いした各社等、この紛争に無関係だったところはまずなかった。ようやく発行にまでこぎつけたことを感謝するのみである。

No. 3 の編集作業と平行して1971年に迎える本協議会の20周年を記念しての「記念特集号」の検討がはじめられている。No. 5、No. 6 をそれにあてる案が出されている。内容についての、ご意見、ご希望をぜひ聞かせていただきたい。

なお No. 2 より発売は丸善にお願いすることになった。

編集担当者：菊川秀男（東経大）、小松勇吉（京大）、中村弘光（アジ研）。

経済資料研究

No. 2

1969年9月15日印刷・発行

辛 200 (〒 45)

編 集
発 行

経済資料協議会出版委員会
経済資料協議会
神戸市灘区六甲台町
神戸大学経済経営研究所内

印 刷

松濤印刷株式会社
東京都新宿区早稲田南町37

発売元

丸善株式会社書籍部
東京都中央区日本橋通 2-6-2